令和６年度 第２回 学校運営協議会

―会議録―

日 時:令和６年９月５日(木) 14:30～16:00
場 所:山梨県立甲府第一高等学校会議室

《次 第》　　司会 教頭

１ はじめの言葉(司会)

２ 学校長挨拶

・オープンスクールは台風の影響で中止にした。

・涼しくなってきたがまだ昼間は暑く強行遠足が心配される。

・北九州 I.H.　　水泳部　女子 200m背泳３位入賞。
弓道部女子団体６位入賞，男子個人７位入賞。

・水泳ジュニアオリンピック（JOC）平嶋亜沙美　200m背泳優勝。

・全国総合文化祭（ぎふ総文）６部出場（県下最多）

・新生生徒会発足

３ 会長挨拶

・時間設定が短いので効率よく議事が進められるようご協力ください。

４ 議事 【議長 会長】

※〔 〕は学校の回答

⑴ いじめ対策について

・いじめ防止の研修を先生方は受けているのか。今は日本人の道徳観が著しく欠如していると感じられる。

⑵学校評価について

・特になし。

⑶学校行事について

・（生徒アンケートの結果より）一高祭は生徒の自主性・主体性が発揮されているか。教師の意見になっているのではないか。こどもの権利条約（ユニセフ），こども基本法（令和５年４月１日施行）に基づき，生徒の意見を尊重することで「やらされている感」のない行事になるのではないか。それが自己肯定感を高めることに繋がる。ぜひそのような指導をお願いしたい。

・資料を見るととても盛り沢山である。従来の行事や企画を残したまま新しいことを始めていないか。教師と子供がしっかりと向き合えているだろうか。子供が生き生きした学校生活を送れるよう心を砕いて欲しい。何を残して何を創出(導入)するか，また，残す場合，なぜ残すのかという検討はしなくてはならない。また，学校行事をう

まく進めるには余裕が必要。生徒を第一に考えて行事を編成することが大事。

・保護者の視点では，わが子は一高に入って良かったと思っている。母校愛が薄まるとアイデンティティが薄まる。学校の伝統を感じられるところは伝統校の良いところ。一高祭のキッチンカーは好評だった。学園祭のような場所で飲食を提供する場合，保健所やら食材の手配やら実はとても手間がかかる。その大変さを知る(感じる)ことは，社会の仕組みや保護者の思いを知る(感じる)ことに繋がる。その上で企画を楽しめると生徒の成長に結びつく。是非生徒にはそういう深いところまで踏み込みつつ楽しんで欲しい。

⑷生徒会活動について

・応援練習が縮小されていると聞く。応援練習に対するクレームなどもあるのだろうか。実際自分が高校生の頃も嫌な時間ではあったが，応援練習の最後の団長の言葉が感動的だった。今ではそうではないのかもしれないが，一高生として残していかなくてはならないものもあるのではないだろうか。応援練習という行事の是非というよりも一高生の自覚をどのようにして育ててゆくかという課題でもある。

〔野球応援で応援歌などが満足に歌えていなかった。このことについては生徒自治会も課題に感じている。コロナ禍の影響で止むを得ず縮小してきた応援練習ではあるがこれについては生徒自治会も練習期間の延長を考えている。指導方法については昭和の頃の恐怖や根性ではなく，今風の指導を生徒なりに考えて進めている。〕

・他の学校に行っていたら得られないものが一高にはある。守りたいものが １ つではないが故に盛り沢山になる。

・応援練習は厳しくてよい。校歌が歌えないうちに卒業なんてことのないようにしなくてはならない。

〔応援練習について，来年度は ２ 日間を計画している。今年度野球応援を ２ 回する機会に恵まれたが一方でこの応援の本番を通して生徒も危機感を持っている。応援練習が不十分である。〕

・校長のカラーに則った反省が必要。つまり，リーダーの方針に対する教員集団の考え方，理解が大事。

・必要なことを生徒会が理解して実行できているかが大事。

⑸探究科の状況について

・「堀川の奇跡」について，京都の堀川高校は探究科を設置して進学実績など急成長した。生徒が探究を深めることで課題発見力や課題解決力を身に付け，自己調整力が向上し学力の向上に結びついている。

・東大寺学園では探究で専門性を深めるとそれに付随して他も伸びている。ノウハウのある先生に来てもらい，一高のカリキュラムに反映させてみてはどうか。新しいことをやるときは引き抜いてきて，一高流に組み替えることがよい。

・頭の中の探究ではダメ。現場で体をつかって実際を知って積み重ねてゆくのが探究の本質である。一高の探究は空理空論が多い。

一例として，「湯村温泉の活性化」について考えてみると，彼らの言っていることは頭の中で考えているにすぎない。湯村温泉の問題は掃除，挨拶ができていないことがまず課題。一高生がやっていた一過性の企画ありきではない。根本的に変えなければ良くはならない。そのような提言が出来るか否かがやる意義の分かれ目である。地に足の着いた活動をして欲しい。

・（中学生の視点としては）「総合的な学習の時間」の実施についてはその題材・深め方・深める程度など踏み

込み方が難しい。一高も迷走している。中学では教員が道筋を作り活動を形作っている。いろいろやりながら磨いて行くしかない。いろいろ言われても続けることが必要。

・探究してゆくのは苦しいこと。テーマを見ると先生も生徒も頑張っていると思う。学校を出て，地域の人と協働して活動していると感じている。方向性や進め方に迷っているように見受けられるが試行錯誤は良いことで迷いを経て行き着くこと（ところ）が大事。

・物事は簡単には出来ないことを知ることも大切。

〔本校では 1 年で探究の基本，2 年で本格的に探究を深めている。3 年次のファイナルプロポーザルに向かって探究している。フィールドワークは良いことは確かであるが，生徒は時間が十分にない。〕

・探究の予算はどうなっているか。

（WWL から支出している。）

・本校の探究の費用に日新基金を充てることは大いに結構であるが，現地に行くことが目的になってしまう恐れがある。同窓会としては内容の濃い事業に基金を投じたい気持ちが強い。

・探究の見本となる事例はあるのか。本校の探究はその方向性があまりにも漠然としている。上手くいっている探究を参考にしてみてもよいのではないか。

〔棚田の保存のように3年生から後輩へ引き継がれているものもある。〕

・巨摩高校の櫛形山の研究のように年々深まってゆく探究がよい。「また棚田か」となってしまうのは何故か。生徒たちも「昨年やったから今年もやる」というのではなく，毎年同じことを続ける意味は何なのか，また，前年を踏まえてさらに深みのあることを企画すべきである。同じイベントを行う意義が分かった上で継続しているのか。

(6)WWL について

特になし。

（7）（1）～（6）の議事の中でその内容に留まらず，学校全体に関わる内容に波及したご意見

・生まれた時代，育った環境など異なり，判断基準も異なるが不変的なモノ・コトもあるので自分の範疇で考えると，大事なことは，どのような仕事をして社会貢献し，税金を納められるかということ。自己実現の方法は様々で人によって異なる。そこで，今進路指導で考えなくてはならないことは，「国公立に何人入れた」だけではない。生徒個々人が自分の道（人生）のためにより良い進路選択ができるよう指導をして欲しい。生徒の主体性を尊重し，より鳥瞰的な指導を進めることが大事。 そのような視点に立つと，服装の指導ひとつとっても，もっと生徒の自由に任せてよいのではないか。自由な発想の方向に学校が進んでもよいのではないか。

〔一高へ来たいか否かの判断基準の一つとしてどこの大学へ何人入れたかがある。学校もできれば全人教育をしたいところではあるが，期待され望まれているところは把握しつつ学校運営を進めている。強行遠足は時代に逆行している観もあるが大事なところでもある。また，学力優秀な人間が社会に出てから出世したり社会貢献しているとは言い切れない。〕

・教育観の相違により保護者と教師の話が出来ない家庭もある。様々な人がいる。

・（指導方法として）強行遠足に遅刻した生徒を頭ごなしに叱らない指導を進めて欲しい。事情を慮ることも必要。一高はロボットを作るような，画一的な教育ではなく，一人ひとりの生徒に向き合った（個に応じた）教育をしてほしい。

・好きなことを曲げる生き方はさせないことが大事である。

5 連絡事項

(1)今後の予定

　　2 月 19 日(水) 第 3 回 学校運営協議会

6 情報交換、懇談(各委員の方から)

7 閉会の言葉(司会)